

⑦ 武田勝三氏（択捉島元島民）



私は、択捉島の入里節（いりりぶし）というところの出身で、4歳のときに父、母、姉、私と弟の5人で島から強制送還させられました。

ところで、皆さんは北方領土をご存知でしょうか。

ある都会で北方領土について調査されたことがあります。その調査では、80%の人が北方領土のことを知らないという結果でした。

皆さんが天気予報をテレビで見るときに、一番右側にある細くて長い島や、根室の納沙布岬の先に点在している島々が北方領土です。

それでは北方領土についてお話ししたいと思います。

北方領土には昔からアイヌの人々が住んでいて、終戦後、ソ連に不法占拠されるまで、一度も外国の人が住んだことのない島です。

北方四島は、どの島も風光明媚でとても綺麗です。島が返ってきたら観光業をやりたいと思うくらいとても美しい島々です。

択捉島には単冠湾（ひつとかっぱわん）というところがあります。昭和16年に日本が戦争を始める真珠湾攻撃の際、日本の連合艦隊が集結し、ハワイに向けて出撃した場所が単冠湾です。

終戦後、ソ連兵はシュムシュ島に上陸し、日本兵に対し、武装解除を行いました。その後、北方領土にアメリカ兵がいないことを確認し、ソ連軍が侵略にきました。

当時の島民は、外国人の姿を見たことがなく、初めて見た外国人が上陸してきたソ連兵でした。約500人のソ連兵が来たそうです。

最初にソ連兵が上陸したのは、択捉島の留別（るべつ）というところでした。島民が一番心配したのが、子供たちのことでした。ソ連兵が来ると連れて行かれたり、殺されたりするのではないかと心配したそうです。女の子は頭を刈り、墨で顔を黒く塗り、またサラシを巻いて男の姿にして屋根裏に隠したそうです。

当時、島にはネズミがいて、悪さをするので家の屋根裏にはネズミを殺す「猫いらす」という薬を置いてありました。それを袋に詰めて、「ソ連兵に見つかったら、これを食べて一緒に死のう。」

と話していたそうです。しかし、月日が経ち、ロシア人と一緒に生活することになりました。

島での産業は、漁業が主体でした。冬には流水が来るため、漁ができなくなるので、どの家庭でも雪が降る前には、一年間の食料を蓄えて生活していました。ソ連兵が上陸したときは、その年の食べる物がありましたが、ソ連兵が日本の食料を求めるようになり、すぐに食料は底をついてしまいました。生きなければいけないので、ソ連兵と一緒に暮らしながら、魚を捕ったり、畑で野菜を作ったりして生活しました。択捉島や国後島では、このような状態が続きました。

ソ連兵が上陸したときは、恐くて逃げた島民もいたそうです。ソ連兵は常に見張っているの、明るい昼間は逃げられません。真夜中で海が時化たときを目掛けて逃げたそうです。

ここに、一家9人が国後島から逃げてきたときの体験談が記載されている書物があります。

そこに記載されているのは、真夜中、船が転覆する可能性があるときに逃げて来たと書かれています。9人は転覆しそうな小さな船に必死にしがみつき、船には半分、海水が入り込み、びしょ濡れになり、風と波で流されて漂流していたとき、突然、陸の明かりが見えました。助かるかもしれないと希望の光が見えた瞬間、一家は波に飲まれ、船は転覆しました。父と母は一人ずつ子供抱きかかえ、岸に打ちあげられました。そこは国後島の瀬石という場所でした。

しかし、残りの5人の子供の姿はなく、翌日、周辺を探したところ、波打ち際に死亡した3人の子供が打ちあげられていました。父と母は、ただ呆然と立っていたそうです。残り2人の子供は、ついに見つかりませんでした。迎えの船が来たとき、幼い5人の霊を深く詫びながら、4人は根室に向かったと記述されています。当時体験した人にしか語れない貴重な話です。

私たち一家は島に残っていましたが、強制送還により島から追い出されました。

最も早かった強制送還は、終戦から2年経った1947年（昭和22年）7月4日で、天寧（てんねい）というところから日本人を運んだそうです。

1947年（昭和22年）6月、ソ連兵は四島の日本人に対し、ソ連の国籍を取得した場合には島に残し、それ以外の人は強制送還するとの選択を求めました。そのとき、日本人全員は島を離れることを決意しました。集合場所となった学校に一列に整列させられました。荷物は一人15kgくらいだったそうです。

まず、小さな船に乗せられ、沖にある大きな貨物船に乗ります。その貨物船に乗せられるときには、小型船からモッコで20mくらい吊り上げられるので、あまりの恐ろしさに大人まで泣き出し、念仏を唱える人もいたそうです。

貨物船は、寿司詰め状態で横になるのがやっとだったそうです。船内のトイレは、甲板に仮設のトイレが3箇所くらいしかなく、また行くには長いハシゴを登らなければなりません。病人、老人、子供などは、そこまで行くことはできないので、やむを得ず空きビンにする人もいました。また、仮設トイレはいつも満室だったため、途中でもらしてしまう人や、船酔いでもどす人もおり、船内はとても不衛生なものでした。

食事は一日一回、薄く切った黒パンと塩魚の切り身などが出されましたが、一口ずつ分け合って食べたそうです。そして、着いたところが樺太（サハリン）の真岡（まおか）というところでした。ブタ小屋のような収容所に1か月くらい入れられ、過ごしました。その後、日本の船が迎えに来て、ようやく北海道へ上陸することができました。

皆さんには、今日お話しした北方領土のことを覚えて帰っていただきたいと思います。また、今日家に帰ったらお父さん、お母さん、友達に北方領土について話してください。今日お話しした北方領土のことを、いろいろな人に話をするだけでも、啓発活動につながりますので、よろしくをお願いします。

<訪問校>

- 網走市立第五中学校（平成24年12月13日（木））

